

清幸のキセキ 回想録

私は昭和6年1月4日に、父 敏雄の勤務地 広島日赤病院で1,900gの未熟児として生れ、まともに育つかどうかかわからない状況だったとゆう。祖母 くにが迎へに来て、冬の事とて祖母の着物の懐の中で、襟巻に巻かれて暖められて、汽車で埼玉の須加にやっと帰ってきた。だから、出生届は1か月遅れで、公式には2月4日生まれになっている。長じて泥まみれで、兵隊ごっこで遊び、夏は利根川で泳いでいた。戦争中、あまり饑しい思いはしなかった。

敗戦の前年、旧制熊谷中学に辛うじて入学することが出来た。当時は内申書と口頭試問と投げる走ると竹登りの試験だった。「青森までゆく幹線の鉄道名は」と聞かれ、あがっていたので奥羽本線と答えてしまった。他の試問にもしどろもどろだった。なにしろ田舎の国民学校とくらべ、あまりにも学校が広く立派で度肝を抜かれていた。迷子にならないようにするのが精一杯だった。

荒木駅まで自転車で、秩父線で熊谷まで20分、駅から隊列を作り30分歩いて登校した。間もなく勤労動員となり、毎日飛行機のジュラルミンを磨いたり、旋盤を操作したりして勉強はなく、一回だけ敵機の機銃掃射があり、防空壕に避難した。そのうち仕事の材料が無くなって来て、これで果たして日本は勝てるのかと思った。恐いもの見たさで利根川の土手で見ていたら、B29の編隊が悠然と飛んでおり、太田の中島飛行機工場に爆撃に行ったのだろうか、2機ほど小さな日本の戦闘機がB29の後ろについたと思ったら、たちまち火を噴き落ちて行った。情けなかった。そして熊谷の大空襲で、翌日町中は真黒に焼け焦げていた。そして遂にほとんどはっきり聞こえない玉音放送で終戦。

幼時から父親の背中をみて育ち、医者になると決めており、他の職業は全く考えになかった。

未だ戦争の影響が強かった昭和23年、東邦医大に入学した。一週毎満員すし詰の蒸気機関車の列車で帰郷し、米をリュックに詰め、下宿に食扶持として納めた。

宮原駅も田圃の真中に新設され、住宅もまわりにはなかった印象が強い。

私個人的には、この際身辺行動を変えようとし、派手な友達とつき合い、硬式野球部に入り十名位のメンバーでやっと試合が成立するとう程度。だから医大リーグでもいつも最下位だった。そして麻雀が面白く、学校近くの雀荘の常連でもあった。あのころは社交ダンスも流行し出し、学校の図書館で月一回パーティーが開かれていた。貧しくも楽しい時期であった。

昭和30年 医学部卒業し、国家試験もパスすることが出来た。面接で、ST低下の心電図を問われたのを覚えている。赤須教授の主宰する産婦人科学教室に入局し、外来・入院・ホルモン研究に頑張った。河原助教授の熱きご指導には感謝の言葉もない。

「婦人科領域における血中 17-ケトステロイドの研究」で医学博士の学位をいただいた。1年上の野口先生と毎日深夜まで研究室にこもって頑張っていた。若かった。

父が急性心不全にて急逝し、急遽帰郷し、川島医院を継ぐことになってしまった。

内科・外科・産婦人科等、殆ど全科に及んだ。

午後から往診は看護師さん1人連れ、20～30軒、南河原が多く、当時は注射も多く、軽自動車の後部座席に注射アンプルを積み、往診カバンの中のアンプルを使い果たしてからそれを使い、静脈注射は用意したのが使い切ると、家で煮沸消毒をさせてもらって、その間うどんをごちそうになっていた。うまかった。

当時はインフルエンザの流行も多かったので、帰宅が深夜になることも多かった。よく働いたものだった。

これまで周りの多くの人の紹介で、十数回くらいお見合いをした。いい人が多かった。急遽診察のため遅刻が3回あって、それは全て断られた。素敵な人にも断られた。すごく好意的な人も数人いたけれど、私の意に添わずお断りさせて頂いた。不謹慎であったが、お見合いが面白くなっていった、次はどのような人だろうか、とか想像するようになっていった。素敵な場所と料理と麗人……

私には妻になる人に自分勝手な望みがあった。自分に欠けているもの、即ち社交性に富み、論理的頭脳、弁舌に勝れている。そして最後にできれば容姿端麗な女性。家庭もそここの程度。

昭和36年12月に、札幌薄野出身 幸子とゆう理想的な女性に、弟 登・和子夫妻の紹介により結婚することが出来た。天にも昇る思いだった。

そして幸子は私の期待以上の人だった。富士見町に出でいきなり交通安全母の会 会長、女性運転者協会

初代会長等々歴任し、市・県要人、特に中川市長・吉田県議とも知遇を得ていた。

その頃、私の母と同居していたが、今でゆう認知症が強くなり、お手伝いはいたものの、その親身な世話は大変なものだった。そして義父 敏雄が、昭和42年11月。その3か月後、飯能の薬局に嫁ぎ二児を得ていた私の妹幸枝の乳がんの療養、数回の手術、入院付添い等の面倒を見て、昭和43年1月に31歳の若さでの見送りがあった。昭和48年4月、義母 ようを看取ってくれた。そして私を特に目をかけてくれ、愛してくれた。私達の娘 美紀を目に入れても痛くない程可愛がってくれた。夫婦仲に恵まれず、薄幸な母を看取ってくれた、その看取りの大変な事の体験の中から、老人ホームの建設を考えるに至り、中川様・吉田様の協力を得て、私の生まれ故郷須加に特別養護老人ホーム 緑風苑を建てること出来た。法人設立・ホーム建設等には莫大な書類提出があったが、今のグリーンホーム長 稲月さんの協力を得て、一人で、或いは吉田県議と二人で県庁に数回に出かけて行った。普通はそれらの書類作成は専門家に頼むのが普通で、全て施主がやるのは異例だと、後日皆様に云われて、褒められていました。本当にその目のつけ所、企画力、そして実行力、それは大した勝利ものでした。

実は私達の結婚に際し、幸子からの強い約束がありました。何しろあの札幌薄野の繁華街から遠く田圃だらけの、昼は蝉が鳴き、夜は食用蛙がわめく環境の全く違うこの土地に嫁すのだから。

それは5年経ったら町へ出ようとゆうものだった。

約束の年限が近づいたとき、貯金もそこそこできたし利子での生活も可能と思ひ、今から町へ出るのは大変だし、このままでいいのではないか、町へ出たら小学校の運動会でもテントの中で椅子席でとゆう訳にはいかないだろうから。

彼女の言い分は、「それでは約束が違う、やりましょうよ。やらないんだったら子供を連れて札幌に帰ります。」とゆうものだった。「貴男は診察・往診に忙しく、夜遅く帰ってくる。私は寂しくてしょうがない。」・・・私は卑怯な男でした。

彼女は深谷の病院の3か所の産婦人科に受診し、様子を自ら診察を受けて見て来ていました。身体が悪くもないのに、その時話を聞きての真剣さに、私は心を打たれました。又、彼女は行田・羽生の魚屋・八百屋に出かけ、良い土地を探していました。深谷・吹上を狙っていたのですが、行田市内が最善との結論に達したようです。行田長野の魚屋さんのおばあさんの世話で、現在の富士見町の土地が決まりました。坪3万円でした。須加の思い出深い土地を600万で、瀬戸内海の島の開業医に医事新報を通じて買ってもらいました。私の出た後の医者を手当をしなければ出てはいけないと地区の人々の要望でした。ですから彼女はそれもクリヤーしたわけです。

富士見町は女子高が移転してきたばかりで、道路は舗装もしてありません。田圃だらけでした。

既に市内に開業して盛業中だった実弟から「特技もなく町に移転開業するのはその場所では危険すぎるから賛成できない。やめた方がよいのでは」との反対がありました。忘れられない言葉です。

土地は現金で、上の産婦人科の建物は日銭の外來・分娩の収入を当ててゆきました。幸いに軌道に乗ることが出来、返済もできましたし、土地の買い足しも可能となりました。融資してくれた足銀に足を向けて眠れない気持ちです。

私の夢だった子供とのキャッチボールも、広い素晴らしい家の芝生の上でできました。洋風の庭園、15m×3コースのプールも作りました。将に二人の夢の実現でした。

それから悲しい長男の自死がありました。

彼は熊高から独協医大に入学しましたが、理数系に弱かったので予科を留年し、予備校に通いたいと申しました。私は自分の経験からして、教養課程はどうにかなるから頑張るように云いました。彼は幸子の方針もありましたが、幼少時秀才と思われる程出来がよく、赤門を見せて、「あなたはここに入るのだよ。」等と云いきかせていました。車が大好きで、車名は全て的中させました。歴史が好きで、とくに城、信長が大好きで、安土城跡には何回も出掛け、全国の城を幸子は連れてゆきました。ですから私は開業医に必ずしもならなくても、医史関連を研究すればよいのではないかと話しましたが、彼は余りにもまとも過ぎました。幸子は「彼の好きなフロックコート・懐中時計・コココーラ・肉を存分に与えたので、私は悔いはない」と強気に云っておりました。仕方なく私はアメリカに留学して医史学者になっていると思うようにしようとしました。

それからの幸子は、皆様ご覧の様に福祉に身を捧げて発展させてゆきました。県の老人福祉の世界でも、指折りの女性になってゆきました。

世の中は少子化に進んで、産科も斜陽になってゆき、ハード・ソフトともに危うくなってしまいました。彼女は当時、緑風苑・グリーンホームも運営しており、そのための老人病院にし、これに小児科を併せてゆくという方針に邁進し

てゆきました。その頃時代は医療圏内での病床規制がありました。中川市長さんが改選を迎え、総合病院の誘致を公約しました。私共の病院転換に総合病院的にしてくれないかとの申し入れがあり、それではと軽々に承知してしまい、慣れない複合科の運営は難渋を極めました。もっとも医師会が患者を取られると反対し、対医師会の説明会を持ったのでした。そしてその場では吊上げ状態でした。

そして息子の帰ってくる迄頑張ろうと、二人で気持ちを一つにしました。それには「クリニックのままでは息子は後継はしない。努力して病院を続けなくては」との思いでした。

私は行田ライオンズクラブの設立メンバーで、第3代会長をやりました。地区最高責任者のガバナーは、7リジョンの持ち回りで、話し合いでさだまって決まっていた。そして平成3年に行田・加須・羽生地方の順番がきました。この地方では行田クラブが一番古く、加須クラブを作っております。ここは行田でやらなければとの世論があり、私がクラブから推挙される状態になりました。

当時、ガバナー職は、1年間200日位家を空け、数千万円のお金を使うとされ、私の職業から言ってもそう留守にするわけにもゆかず、お金も大変。だから断っておりました。加須からは「そちらが出ないならこちらから出ます」との働きかけもあり、行田クラブでは親クラブの面子にかけやらなければとの話になり、大いに悩みました。

その時幸子は、「お金なんか何とでもなる。男子一生に一度の埼玉4000名のトップになる。なんと名誉な事か。ぜひやりなさいな。」と尻を叩かれ、出馬をすすめられまして、私はガバナーを引き受けた状態でした。

後から名誉顧問として、会員である限りは国際協会の役員であるわけで、県下の名士との交際もできております。あれもこれも全て、妻 幸子の後押しのお蔭です。

その幸子が平成10年9月21日、緑風苑長室で倒れ、脳出血左片麻痺に陥り、悲嘆にくれましたが、幸にリハビリを一生懸命やり、杖歩行が出来、頭も異常なく、送り迎えて勤務にも出、市の介護保険介護度判定委員にも毎週出ておりましたが、平成14年10月6日、私の留守8時半頃、トイレに行く途中転倒し、左側頭部を強打。硬膜下血腫を起し、関東脳外にて開頭手術を受けるも、一命をとり止めたのみで、今だ5年近くなるも植物人間になってしまっております。

今から遅まきながら老後の二人の生活を豪華にしようとしておる時、私は残念で、いまだに涙に泣いており、仕事も手につかなく、足も地についていない状態です。悲しいです。

私も先日、前立腺癌と診断され、治療中です。

又、クラブの旅行例会で転倒して、胸椎圧迫骨折を起こしてしまい、踏んだり蹴ったりされた状態です。

最近では死と向き合っているとゆったところですが。